

鶴飼石和川

是^{イロ}ハ安房^{あは}の國^{くに}清澄^{きよすみ}より

出たら僧にてゆわれいまだ
甲斐^{かい}の國^{くに}を見ずゆ程に
たぐいま^{上レリ}行脚^{あんぎや}とこゝろざし

ゆくすゑいつとしら波の
安房の清澄たち出て
六浦^{むつ}のワたり鎌倉^{かまくら}山^{やま}
やつれはてぬる旅すがた
日たけてこゆる山道を

すまいて石和につまにけり
ナ^{イロ}ヨ^{イロ}く^{イロ}身ハいか^{イロ}なる人ぞ
さん^{イロ}の^{イロ}是ハ^{イロ}鶴つかひにて
見^{イロ}申せばは^{イロ}やばんくん^{イロ}に年
たけたよひて^{イロ}の^{イロ}がか^{イロ}る

殺^{イロ}生の^{イロ}ワざも^{イロ}つたいなし
あ^{イロ}はれ^{イロ}止^{イロ}有^{イロ}て余^{イロ}の業^{イロ}
にて^{イロ}身^{イロ}命^{イロ}を^{イロ}は^{イロ}つ^{イロ}な^{イロ}ぎ^{イロ}あ^{イロ}れ^{イロ}か^{イロ}し
仰^{イロ}尤^{イロ}に^{イロ}は^{イロ}得^{イロ}共^{イロ}若^{イロ}年^{イロ}の^{イロ}頃^{イロ}より
此^{イロ}業^{イロ}にて^{イロ}身^{イロ}命^{イロ}を^{イロ}助^{イロ}比^{イロ}程^{イロ}に

「まやうらとらふもふも」と成がたし
「ハッ」^{イロ}ぜしもなし然らば罪障^{上テリ}
懺悔^{さんげ}の為^{ため}に鶺鴒^同を遣ふて仰見せ
いらく後世^{ごせ}をばよきに訪^{とむ}し
「あ」^{イロ}ら有^{シテ}がたやいざさらば
鶺鴒^同を遣ふて御目^{ごめ}にかけん
とくくは舟^{ふね}に御移^{ごうつり}あれかしと
「僧」^{ツリ}のよをとり^{ツリ}のせよいらせ
鶺鴒^同をひらきあら鶺鴒^同どもを
この川波^{なみ}にさつとはなせば

おもしろのありやいませ
いと夜かり様サマの草むしる
鐘ツカはまくらにおちこちの
おぼつかなきにゆめ山を
見ろかいもなき身の上の
鶴舟にともすかづり火は
こぼれく〜てとし〜づ〜の
つみとむくひをゆびにをる
よわひたけたたる眉まゆの色
しろき霜しもが夏の夜の

月をにくむとも心のやこ
昼をばいさや石和川
藤ツタのころもの玉たすき
しらのしやんをむすぶかな
とけてちきりしにしくを

おもしろおせばいりしやの
づまいはたちをふたつこつ
こゆるばかりの床とこの山
夜着よぎにもたれて睦言むつごの
づたへきく遊あそ子伯陽はくやうは

月に向ひてぬがふたる子よ
それハ夫婦のふたつ星^{ほし}
われもおちにしその月を
いまはいたふて更る夜に
しめる松明^{たいまつ}ふり立て
おどろく魚を追^{をい}まはす
あら鶴も川のころしれ合
ぽつと飛^{とひ}かふほたる火の
ひかりに見れば小鮎^{こあゆ}かと
かづま^{かづま}あぐればおとしるや

すくひあぐればおとしろや
おすれはてたる後の世を
おそれもやらぬ境界も
筋ハわかるゝ鶴繩の末の
もとハひとつによろの水

むすぶとすればくだかけの
鐘におくれつさきだちつ
あくろにちかく風口たる
舟と舟とのかげうつろ
真如の月やのころらむ